

2019

Spring

ほにわ ほいほす

CONTENTS

- | | |
|-------|-----------------------|
| 01 | news / 理事長まえだのヨモヤマバナシ |
| 02 | お母さんの日々あれこれ |
| 03 | 地域探訪 / アトリエナニワ |
| 04-05 | Case book |
| 06 | サポータークラブだより |
| 07 | スタッフ紹介 / あとがき |



ホームページをリニューアルしました！！



法人ホームページをリニューアルしました。アドレスは、以前と変わらず、<http://naniwanosato.jp/>のままです。

今回新設したのは、「現場の様子」のコーナーです。現場スタッフの一日の様子と、一言メッセージが載っています。

ぜひ、左のQRコードからアクセスしてみてください！(小池)



実践事例発表会のご報告

2月15日(金)、柏原市立国分図書館で事例発表会を実施しました。当日は外部参加者の方36名、内部スタッフ33名、合わせて69名の方に参加頂きました！

アンケートでは外部参加者の方々からありがたいお言葉を頂きました。

『データに基づく検証はとても大切だと感じました』

『利用者さんの人生に関わっている仕事、という言葉が響きました』

発表者は日々の業務の合間をぬって準備をしてくれました。準備は大変ではありませんが、自分たちの行っている支援について振り返り、また外部の方と共有し合える貴重な機会だと改めて感じました。ご参加下さった皆様、ありがとうございました！(小池)



障害児者福祉におけるファンファースト

人口減少、市場規模の縮小が続く中、「ファンファースト」を掲げ、コアなファン層によりよいサービスを展開する企業が、売り上げを伸ばしている事例があるようです。

お菓子メーカーがファンといっしょに商品開発をしたり、プロスポーツチームがグッズ購入特典に、好きな選手と写真撮影ができる等、一般の消費者にとっては価値が低いものでも、ファンにとっては、より時間・労力・財力を投入しても、購入したいと思う価値が高いサービスを展開するという戦略です。

おそらく従業員にとっても「自分たちの産み出すサービスをこんなにも指示してくれる熱烈的なファンがいるんだ」と実感できる場合は大きな励みになり、よりよいサービスを展開する上でも大きな原動力となっているのではないかと思います。

残念ながら障害児者福祉版「ファンファースト・ビジネスモデル」は、簡単には成立しない構造になっています。国の制度・標準的なサービス支給量より「多くの支援を求めている層(ファン層)」が、サービスを追加購入すること自体が認められていなかったり、そもそも障害年金の範囲内では、より多くのサービスを継続的に購入することが困難な状況があるからです。

更には言えば、その前に「サービスが圧倒的に足りない」。その足りていない部分を現場のスタッフが埋めてきた(ファンファーストが伝わっていない)という情報発信・共有不足があると思います。

昨今の社会福祉法人改革の流れでは「より幅広く地域貢献を」とのことですが(逆行しますが)、本当に支援を必要としている方々(ファン層)にとって、より価値の高い支援を維持していくため、共に新しい発想で歩んでいきたいと思えます。

理事長まえだの ヨモヤマバナシ

子どもたちにスペシャルタイムを☆彡

土曜日の夜に4人の子どもを連れて近所の銭湯に行くのが僕の日課です。

子どもたちは、銭湯の帰りにスーパーに寄ってアイスを選んで食べることも楽しみなようです！そして妻は、この時間を利用して、普段子どもたちがいると思うように進まない家事をまとめてしてくれています（感謝!!）。そんなお母さんに子どもたちから唐揚げのお土産を買って帰るのも定番なんですよ。

一週間がんばった子どもたちへのご褒美時間、子どもたちの心が整う、我が家では大切な時間になっています。

by ハイチュウパパ

今回は初めてお父さんにインタビューをしました。お父さんとお子さんだけの楽しい時間があるってステキですね。奥さまへの日頃の感謝の気持ちもたくさん感じられました。お二人のお父さん、ほんとうにありがとうございました♪

(忍穂・川端)

今回のテーマ

『そこは俺に任せろ』

お父さんの 日々あれこれ vol.22

お父さんが日々感じていることを
ちょっとだけ垣間見るコーナーです

できることをできる時にさりげなく

家内も仕事をしているので、僕ができる時はできるだけ家のことをしています。朝食には子どもの好きな玉子焼き、夕食はカレーや野菜炒め、ポトフなど簡単なものだけ作っています。勿論、洗濯や掃除もできる時にはしてますよ😊 結婚前に1人暮らしの経験があるので、家事が苦になることはありません。昔取った杵柄ですね👉

子どもと一緒に外出もよくしています。子どもは小さい頃からドライブが大好きで、指定席の助手席に座り気に入った音楽をかけて出かけます。旅行もよく行きましたねえ～ 大人になった今でも、ドライブを一緒に楽しんでいます🚗 最近は散歩も楽しめるようになったので、健康管理もかねて片道30分ほどの所にあるスーパーまで歩いて行き、店内をブラブラしています。

家内は何も言わないのでどう思っているかわからないけど、できることをできる時にするようにしています!(^^)!

by しげちゃん (60代)



社会福祉法人ゆりり福祉会 PicaPica 作業所

〒581-0003
住所 八尾市空港 1-146-2
TEL 072-997-7475



パン作りの厨房



ミントなどを栽培する畑



陶芸の窯もあります！



地域探訪



地域で暮らす当事者の方や、ご家族が使える
社会資源を紹介するコーナーです

今回は、八尾市の就労継続支援B型事業所の、社会福祉法人ゆりり福祉会 PicaPica(ピカピカ)作業所を訪問し、施設長の井藤陽介さんにお話を伺いました。

PicaPica 作業所は、「カフェ&ベーカリー PicaPica 空港店」と、八尾市役所内にある「cafe rest PicaPica 市役所店」という二つのカフェを運営しています。作業所の仕事は、軽作業(内職)に加え、パン・焼き菓子・弁当製造、食材を作る畑仕事、カフェで使うお皿を作るための陶芸、接客など、カフェを中心に広がっています。さまざまな仕事があることで、利用者さんは、それぞれの個性・希望に合った仕事を選び、ステップアップしていくことができます。

訪問してまず驚いたのが、店の外装から内装、販売している小物に至るまで、とても洗練されていることでした。一般のカフェと変わらないサービスを提供する中で、お客さんに利用者さんの働く姿を見てもらい、接してもらいたい。そして、この積み重ねの結果として、障害の理解が少しでも社会に広がり、利用者さんが地域に根差していくことに繋がっていけばと、井藤さんは仰っていました。取材の日はいくくの雨にも関わらず、続々とお客さんが来店され、利用者さんはそれぞれの個性で接客していました。その姿を見ると、PicaPica が地域に「在り続ける」ことが、人々の意識、そして社会を変えることに繋がっているのだと実感することができました。

取材後に、ハンバーグランチを頂きました。手作りのお皿に美味しい料理、オリジナルのソース。利用者さんの個性がトレイの中で一つになり、まるで PicaPica という「場」そのものを表わしているような、大満足のランチでした！ぜひぜひ皆さんも味わってみてください (重安)

何の変哲もないただの**カゴ**

「領域」が不明瞭だと困ってしまう…
この状態だと安心してお気に入りのカバンを置くことができないけれど…

ツールの説明

何の変哲もないただのカゴ。ですが、ただのカゴとあなごることなかれ！「カゴ」によって領域を視覚的に示すことで、今まではこだわりによって手放せなかった特定のカバンなども、混乱なくその領域に置くことができるようになりました。

カゴによって置くべき「領域」が理解できたら、安心して置くことができる



ツールのメリット等

くどいようですが、何の変哲もないただのカゴ。だからこそ、「必要な時間」「必要な場所」に、どのような対応者でもすぐ設置でき、本人のその時の状況に合わせた個別の対応・配慮が可能になりました。

なにわの里で使用している自立課題や支援ツールを紹介するコーナー

(星野)



「ダメ」よりも「良い行動」を伝えるには？

入所・GH支援2係 中須賀 拓人

【Aさんについて】

Aさんは知的障害を伴った自閉症の男性です。絵カードを並べた一日の予定表を使用して過ごしています。お菓子や飲み物が好きで特にコーヒーを好んでいます。

Aさんは以前から他利用者の居室に入り、布団を持ち出し一定の場所に集めることがありました（以下、布団収集と表現します）。この行為によって他利用者の方の迷惑になったり、布団を持ち出す際に転倒し怪我をしたりすることがありました。これまでもいくつか支援を行いましたが、Aさんの行動は変わりませんでした。そのため、今回は数人でチームを組み、布団収集をなくすための支援を考えました。

【支援のプロセス】

1. 布団収集の要因と支援の方向性

まず、チームで布団収集の要因を議論しました。「時間を持て余しているのでは？」「他者の真似をしている？」「過去の経験から行っているのでは？」などの意見が挙がりました。しかし、なぜ布団収集をするのか？は行動が開始してから長期間が経過していたため要因を絞り込むことは困難でした。

そのため、生活場面での活動の流れを見直すことや、Aさんが新たなスキルを習得することを考えました。具体的な案として「新しい余暇活動の習得」「環境を変えてみる」「布団収集がダメなことを伝える」「布団収集がなければ良いことがある、ということ伝える」といった意見が挙がりました。

2. 支援方法の検討

具体案について、さらにどの支援を実施するか話し合いを進めました。

「余っている時間で新しい余暇活動をする」という案は、余暇活動で布団収集の行為を軽減できるのか不明という意見もあり、この支援には取り組まないと判断しました。

「環境を変えてみる」という案は、情報を整理する中で、過去に偶発的に環境が変わったことがありましたが、布団収集はなくなりませんでした。そのため、この方法は取り組まないと判断しました。

「布団収集がダメなことを伝える」という案は、Aさんは言葉かけや支援者の制止だけでは「ダメ」ということを理解することが難しいです。Aさんの行動に対して、「ダメ」を伝える方法は思いつきませんでした。

「布団収集がなければ良いことがある」という案は、布団収集がなければ好きなものが手に入る、ということでした。Aさんは一日の予定を、絵カードを使用して理解しています。また、予定の中止や変更は中止マーク（シンボルカード）で理解しています。視覚的な情報で伝えることで「好きな物がある／中止で好きな物がなくなる」を理解することができると考え、この方法で取り組むことにしました。

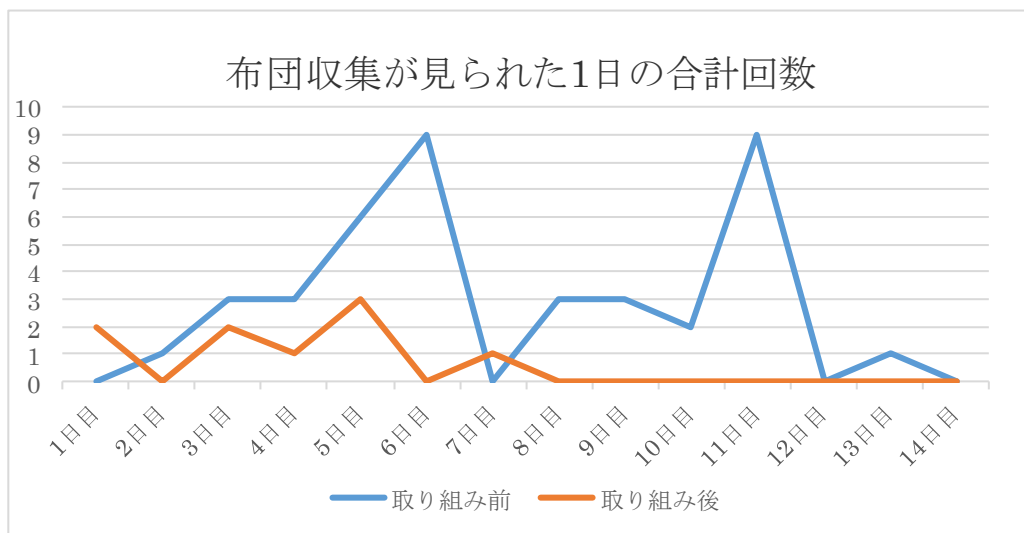
具体的な方法は、「ABA(応用行動分析学)の好子消失による弱化」という方法を応用しました。対象となる行動の直後に好子(本人にとって好ましいもの)がなくなるとその行動の起きる頻度が少なくなるというものです。本支援では、行動とは布団収集、好子はコーヒーと設定しました。一日の予定に絵カードで、コーヒーを飲む活動と飲む回数を提示しました。そして、布団収集があった場合は、中止カードを用いて一回ずつコーヒーの活動を中止します。布団収集がなければコーヒーが飲めることを伝えることで、布団収集が減ることを狙いとしていました。

4. 支援実施前の記録

支援を取り組む前に布団収集がどれくらいの頻度でどの時間帯に多く起きているか記録を取っていました。その結果、16時から22時までの時間帯に多いことが分かりました。

5. 支援実施

支援前の記録から布団収集が多い時間帯に絞って取り組みを開始しました。支援前と同様に、一日の頻度の記録を取りました。下記のグラフは支援前と後で記録を比較したものです。




6. 支援結果

記録から支援実施後は、布団収集の回数が減少していることが分かりました。支援を開始して数日は布団収集がりましたが、「布団収集がなければコーヒーが飲める」経験を重ね、記録した時間帯ではほとんどなくなりました。

【まとめ】


支援によって布団収集は軽減しましたが、取り組みを行わなかった時間帯（早朝など）に布団収集をすることは現在も続いています。支援を振り返り、ほかの時間帯でも取り組めるようにしたいと思います。振り返りの中で気づきがありました。応用行動分析を用いた支援を行ったことで、改めてAさんにも「行動」と「好きな物（結果）」を結びつけて理解することができる、ということを確認することができました。本支援に限らずに、様々な場面でこの情報を活かせるようにしたいと思います。アプローチの方法によってはまだまだ私たちの知らないAさんの長所を引き出すことができるのだと思います。それを知ることができたことを嬉しく思うのと同時に、この経験を忘れずに今後もなにわの里で生活する方の支援をしていきたいと思っています。

なにわの里 サポーターだより



今回この「サポーターだより」の代役を務めることとなりました、小池と申します。

まず、皆さまからのご寄付について、心より御礼申し上げます。そして、皆さまからそれだけのご期待を頂いているのだ、と改めて感じております。



私は今は事務局で働かせて頂いているのですが、数年前までは支援の現場におりました。ある年のなにわの里家族会（現なにわの里と歩む会）に出席させて頂き、支援の事例を発表したことがあります。その発表が終わり、ご出席されているご家族の皆さまから拍手を頂いたのですが、ある一人のお母さんが拍手をしながらじっとこちらを見ておられました。

微笑みながら、たくさんさんの想いが詰まった眼差しで自分のことを見てくださっている、「現場のあなたたちが頼りなのよ」というメッセージが込められている、と感じました。もう9年ほど前のことになるのですが、今でもそのお母さんの表情と眼差しを思い出すことができます。その期待に沿うことができているのだろうか、と不安になることもあるのですが、地道に自分たちができることに取り組み続け、いつかその期待に少しでも応えることができた、と感じられるようになりたいと思います。

新年度、そして、新しい元号がスタートしました。皆さまからのご期待に沿うことができるよう、精進致します。今後ともどうぞよろしくお願い致します。

なにわの里サポータークラブに資金又は物品・労力などでご支援をいただいた方々（敬称略・順不同）

（2019年1月1日～2019年3月31日）

法人・団体の部

(株)カシワラテック

個人の部

小島 純子

森 克雄

渡邊 信邦

井上 政二

井上 明子

三木 由貴男

なにわの里スタッフの紹介コーナーです。
インタビュー形式で、スタッフの声をお届け
します!



中林 英梨
(入所・グループホーム支援1係)

スタッフウ〜



ー中林さんは福祉系の学校に通っていましたが、なにかきっかけはあったんですか?

きっかけは、「母に勧められたから」ですね。高校2年くらいで進路を考えていた時、母が「あんた、福祉とかは向いてるんちゃうの?」と言ってくれたんです。もともと、保育士さんにあこがれていた、ということもあるかもしれません。

ーなにわの里との出会いは?

学校の就職課になにわの里のパンフレットが置いてあって。発達障害に関心があり、関連のゼミに属していたのですが、パンフレットの「発達障害」という文字にひかれて・・・、という感じですね。

ーこれまでの経験の中で一番思い出に残っていることは?

一番となると決めづらいのですが、これまで新規利用者さんの受入れを2回担当させて頂きました。それが印象に残っています。この前、そのうちの一人の方が入所されて1ヵ月くらいのときの写真を見る機会があったのですが、とても険しい顔をされていて、今とはずいぶん表情が違うなと感じました。私個人ではなくてチームみんなで取り組んだ結果だと思います。

STAFF

INTERVIEW



あ
と
が
き

- 先日、駅で外国人観光客に「大阪城に行くには?」と尋ねられました。「ゴー、ストレート」「アールド、アップステアーズ」ちゃんと着けたのかな・・・。(小池)
- GWはレンタサイクルで京都巡りをしました。どこも凄い混雑でしたが、鴨川沿いを自転車で走ると爽やかで気持ち良かったです!翌日は見事に筋肉痛でした(^^)(楳田)

2019年 春号(No.94)

2019年 5月17日発行

発行責任者 前田研介

社会福祉法人 なにわの里

〒582-0025 柏原市国分西1-3-43HOPE 101 202

E-mail naniwa@naniwanosato.jp

HP <http://www.nanwanosato.jp>